

〔共同研究：中堅大学生に必要なリテラシー能力の研究〕

教員が大学初年次生に求める能力とは何か： 教員意識調査を通じて

辻 洋一郎
藤 間 真
巖 圭 介

要約

大学新入生の学力低下が深刻化するなかで、大学での履修を円滑に行うための支援が議論されている。しかし、そのために必要な基礎的スキルとその範囲については、必ずしも合意があるわけではない。本論の目的は、大学における修学を円滑にするために初年次生が習得すべき知識・能力とその範囲について議論することにある。その材料にするため、授業を担当する大学教員に対してアンケート調査を行った。その結果、教員は初年次生に対して、リテラシー能力の不備とコミュニケーション能力の欠如を問題視していることがわかった。得られた結果は、今後どのような能力をどの段階で教授すべきか、という視点から議論される。

1. はじめに

大学新入生の学力が年々低下する傾向にあり、大学入学後の修学に支障を来すケースが増えつつある。例えばある調査では、56%の教員が学生の基礎学力不足を指摘しており、37%の教員が同じく学習意欲の欠如を指摘している（私立大学情報教育協会：以下「私情協」と略す、2008）。また、2004年に全国408大学の教員を対象に実施された調査では、「学生の学力低下が、やや問題になっている」が約53%、「授業が成り立たないほど、学力低下が深刻になっている」が約8%と、概ね半数以上の教員が学力低下を実感しているという結果が報告されている（柳井、2006；石井他、2007）。実際、授業を適切に受容できず留年や退学に至る学生も多い¹⁾。大学での履修を円滑にするため、特に高年次での専門的教科の履修を視野にいれた場合には、初年次で授業を円滑に受容するための支援学習を設けることが今まで以上に急務になりつつあるのである。そのために、さまざまな議論と取り組みがなされている²⁾。

ところで、大学での修学に必要な基礎的能力は何かという問題やその範囲をどのように設

1) ある大学では留年率は20%に及ぶ学部もあるといい、その多くが初年次からの躓きという。
キーワード：初年次教育、リメディアル、リテラシー、教員アンケート、文化系大学

定すべきかについては、必ずしも合意があるわけではない。前述の調査でも、「基礎学力」や「学習意欲」等の設問があるものの、それが具体的に何を指し示しているのかは明確ではないように思われる。もちろん初年次生に必要な知識・能力は専門分野ごとに異なり、また大学・学部が目的とする学生の将来像によっても異なる³⁾。しかしいずれにしても、具体的に初年次生への対策を考える場合には、具体的な学習スキルの内容を設定することが不可欠となる。

本論の目的は、大学の教員を対象に行ったアンケートの結果をもとに、教員が初年次生に求めるスキルを特定し、その項目の妥当性を考察することにある。そのため、大学としては平均的で数も多い中堅文科系大学を例に、初年次生に求められる具体的な学習スキルについて議論を行う。

対象とした桃山学院大学（以下「本学」という）は、大学入試の偏差値の点ではほぼ平均的なレベルにあり、規模的にも中位に位置する文科系5学部の大学である⁴⁾。

アンケートでは、まず教員に対して初年次生の学力や学習スキル等が過年度と比べてどのように変化しているのかを問い、次に初年次生に欠けている学力や学習スキルについて具体的な記述を求めた。これらの設問から初年次生が修学を円滑にするために習得しておくべき能力・資質を特定し、取り組みを前提とした議論を行う。その結果は、実施中の初年次生向けのリメディアル科目での経験を踏まえて考察される。

2. 対象と方法

アンケート調査は以下の要領で行った。

- ① 対 象：桃山学院大学専任教員（研修中の教員等⁵⁾を除き、135名）
- ② 時 期：2009年10月下旬～11月上旬
- ③ 方 法：アンケート調査依頼書及び質問用紙（末尾の資料1を参照戴きたい）を配布し所定の回収場所を指定し回答を得た。またメールで同じ内容を配信し、返信してもらう方法も補助的に用いた。
- ④ 回答数：52件（37.7%）

2) 具体的な取り組みの詳細については、例えばリメディアル教育学会発行の「リメディアル教育研究」(<http://www.rimedial.jp>)で詳しく紹介されている。

3) 文科系と理科系では当然のことながら要求されるものが異なる。理科系の場合、高等学校までにて得ておくべき理系の知識・考え方が大学での履修には不可欠である。一方、文科系の場合は、語学など積み上げ型の一部科目を除き、基礎的知識が不可欠というより、むしろ研究を行うためのアカデミック・スキルや新しい知識・概念を習得するための方法論の確認または補強が中心となる。また、大学・学部で、研究中心であるかまたは職業養成的な性格をもつかどうかによって教育目的が異なるため、それぞれの初年次に要求するレベル・範囲が変わってくる。

4) 学部学生数は7,058名、大学院生89名（2009年5月1日現在）で、経済学部、社会学部、経営学部、法学部、及び国際教養学部（旧文学部を平成20年に改組）からなる。詳細はホームページを参照戴きたい（<http://www.andrew.ac.jp>）。

5) 本論文の著者3名は構成員であるが、アンケートには参加していない。

⑤ 回答者のプロフィール

・学部別回答数	国際教養学部	11名	・勤続年数	3年未満	5名
	法学部	9名		3年以上	43名
	社会学部	7名		無回答	4名
	経営学部	8名			
	経済学部	13名			
	無回答	4名			

3. 結 果

(1) 現1年次生の印象について

現1年次生の学力を現在の3年次生と、また現1年次生は学習スキルが身についているかどうかを現3年次生及び5年前の1年次生と比較した場合の印象に関する回答を表1にまとめた。

現1年次生の／	非常に落ちて いる	どちらかといえば 落ちて いる	同じ程度	上がっている	小 計	わからない その他	合 計
学力は3年次生と 比較して	6 (18%)	11 (32%)	16 (47%)	1 (3%)	34 (100%)	18	52
学習スキルは3年 次生と比較して	5 (14%)	11 (31%)	17 (49%)	2 (6%)	35 (100%)	17	52
学習スキルは 5年前と比較して	12 (33%)	16 (44%)	7 (19%)	1 (3%)	36 (100%)	16	52

表1 現1年次生の学力の印象

「わからない・その他」⁶⁾を除くと、現1年次生については、学力も学習スキルも、3年次生と比較すると上がっていると考える教員はほとんどおらず、「同じ程度」と考えるか、または「非常に落ちて」と「どちらかといえば落ちて」と考える教員がほぼ均等であることがわかる。一方5年前と比較すると、現1年次生の学習スキルは低下したと考える教員が77%と大半を占めている。教員から見て、5年前と比較すると初年次生の学力・学習スキルの低下は大きい、この3年は低下傾向であるものの以前と比べて低下はさほどではないと感じている、と思われる。

また、学習姿勢や意欲についても同様の傾向であることが表2からわかる。

学習姿勢・意欲は5年前と比較すると低下は大きい。しかし、現3年次生と比較すると低下傾向であるものの、それ以前に比べて低下傾向はさほど大きくはない。少なくとも、学習スキルも姿勢・意欲も、低下傾向にあり、その下落はかなり以前に起こっている、と教員の多くが感じていることとうかがえる。

6) 国内研修中の教員や、着任後まもない教員はその他に分類している。

現1年次生の／	非常に 落ちている	どちらかといえば 落ちている	同じ程度	上がっている	小 計	わからない その他	合 計
学習姿勢・意欲は 3年次生と比較して	4 (11%)	14 (37%)	18 (47%)	2 (5%)	38 (100%)	14	52
学習姿勢・意欲は 5年前と比較して	8 (23%)	15 (43%)	12 (34%)	0 (0%)	35 (100%)	17	52

表2 現1年次生の学習姿勢・意欲

大学生活の早い時期に学習スキルを磨く機会を設ける必要があるかどうかについての回答を表3にまとめた。

	是非とも 必要である	できれば あればよい	どちらでも よい	不要である	小 計	わからない その他	合 計
1・2年次に 習得プログラムは	28 (60%)	15 (32%)	2 (4%)	2 (4%)	47 (100%)	5	52

表3 初年次での学習スキル習得の必要性

1・2年次で必要な学習スキルを習得させることが「是非とも必要である」と回答した教員は、60%と半数以上を占めた。「できればあればよい」と考える教員を含めると92%に上り、大部分の教員が、学生に対して初年次での学習スキルの教授が必要であると考えていることがうかがえる。これは、初年次生は学習スキルの習得が十分ではなく、早急に対応が必要と考えている状況を反映していると思われる。

(2) 教員はどのようなスキルの習得が必要と考えているのか

それでは、教員は、初年次に学生としてどのようなスキルを習得しておくべきと考えているのであろうか。ここでは、学習スキルと学習姿勢・意欲とに分けて教員が回答した必要要件をまとめる（回答そのものについては、資料2として末尾に掲載した）。

学習スキルについて

学習スキルに関して、想定される11項目を設定し、重要度について専任教員から回答を得たのが表4である。

「初年次では必要ではない」の項目については、「⑥勉強の仕方」や「⑨教員と会話する力」等で多少多いものの⁷⁾教員は、概ね大部分の項目を必要と考えていることがうかがえる。多くの教員が「最重要」または「重要」と考える学生スキルは、「①講義を聴いて理解する力」、「②本を読みこなす力」、「③論理的に考える力」等で、授業を受容するために必要なりテラシーのスキルを重視していると考えられる。一方、「⑨教員と会話する力」や「⑩筋道

7) 「①聴いたことを応用・展開する力」を含めて、後年次の専門教育で養成するスキルと考えれば、「⑥勉強の仕方」の設問は研究に対する勉強方法を想起させたのかもしれない。

学習スキル	最重要	重要	できれば身につけるのが望ましい	初年次では必要ない	無回答その他	合計
① 講義を聴いて理解する力	31	14	2	0	5	52
② 本を読みこなす力	29	17	2	1	3	52
③ 論理的に考える力	19	23	5	1	4	52
④ 講義をメモする力	28	15	6	0	3	52
⑤ レポートを適切に書く力	17	23	8	0	4	52
⑥ 勉強の仕方	23	14	8	5	2	52
⑦ 質問に答える力	13	25	11	0	3	52
⑧ 発言・質問する力	17	20	11	1	3	52
⑨ 教員と会話する力	19	16	11	4	2	52
⑩ 筋道立てて発言する方法	14	19	15	1	3	52
⑪ 聴いたことを応用・展開する力	11	20	17	3	1	52

表4 教員から見た、初年次生が身につけておくべき学習スキル

立てて発言する方法」「⑪聴いたことを応用・展開する力」などの、直接授業の受容とはわからない部分については「できれば身につけるのが望ましい」ものの、重要度としては先の項目等よりは低くなっている。

設定した11項目以外に必要と考えるスキルについては、次のような回答が得られた。

- ・図書館に行く好奇心と気力
- ・疑問をいadak精神力⁸⁾
- ・漢字（日本語の文章）を読み理解する力
- ・自分の欲望を意識して言語化すること
- ・字を丁寧に書く
- ・社会のいろんな場面で体験し、自分のものとする力
- ・他人(仲間)と体験を共有し、他人の思いに共感する力
- ・漢字、算数、理科、地理など、これまでの大人が普通に持っている力を持つこと
- ・言語能力
- ・何らかの成功体験
- ・具体的な目標設定をさせる
- ・資料収集のための文献検索の仕方
- ・資料収集のためのインターネットの利用

一方、専任教員からみて「本学の初年次生に欠けていると考えられるスキル」についての

8) 疑問を抱き、考え続ける忍耐力が必要、という意味と推測される。この事項を含めて回答の表記はアンケートに記載された通りを掲載している。

回答（末尾の資料2-1）をみると、これをさらに深めることができる。自由記述では、講義を聴く力や読み書きなどが指摘されている点は表4と同じであるが、他方、コミュニケーションに関する要求や学習姿勢やマナーをはじめ、やる気、忍耐力・集中力等、非常に多方面にわたって指摘が行われている。これらのことから教員は、まずはリテラシーのスキルを重要視してはいるが、それに併せてコミュニケーションや属人的な姿勢を求めていることが浮き彫りになると考えられる。

学習姿勢・意欲について

教員から見た「あるべき初年次生の学習意欲・姿勢」について、予め想定した5つの項目に関する回答結果を表5にまとめた。特に「①自発的に学ぼうとする意欲」や「②講義を聴く意欲」に重きを置いている教員が多いことがわかる。

設定項目	最重要	重要	できれば身に 着ける のが望ましい	初年次では 必要ない	無回答 その他	合計
① 自発的に学ぼうとする意欲	34	11	4	0	3	52
② 講義を聴く意欲	24	18	6	0	4	52
③ 講義に対する興味	15	24	9	0	4	52
④ 遅刻せず出席する意思	17	16	12	2	5	52
⑤ 予習・復習しようとする姿勢	8	22	16	1	5	52

表5 教員から見た、あるべき初年次生の学習姿勢・意欲

設定した5項目以外に必要なものとして、次のようなものが挙げられている。

- ・図書館に行ってみようという好奇心
- ・学生が興味を抱く講義にする努力
- ・体験学習の拡大
- ・自分がどうやって経済的に自立して働いていくかを考え計画すること
- ・まじめに学ぼうとする姿勢
- ・社会のいろんな場面で体験し、自分のものとする力
- ・他人（仲間）と体験を共有し、他人の思いに共感する力
- ・将来設計に対する意識の高さ
- ・私語を慎み講義に集中する力
- ・自分とその周辺よりも外部の世界（つまり社会）について知り、考えようとする姿勢
- ・何であれ、知識や学習は自分を豊かにしてくれるものだと発想できる感覚
- ・自発的に学ぶ意欲

(3) 教員は学習スキルが身につかない原因を何と考えているのか

これまでの回答で、初年次生は初年次に必要なスキルが身につけていないと考えている教員が多い。それでは、教員はその原因を何であると考えているのであろうか。

アンケートでは、この点についても自由記述での回答を得た（回答の詳細は末尾の資料2-2に附した）。これらを大まかに区分すると、図1のように、①それまで受けた教育に由来する原因、②社会状況に由来する原因、及び③個人に由来する原因の3つに分類することができると思われる。

「それまで受けた教育に由来する原因」は、入学以前の教育ではそもそも必要とされてこなかったのではないかと、高等学校までに、文章を書く機会、読書習慣の醸成、及び学習の習慣化がなされていなかったこと等を原因とする見解である。また、インターネットの普及によって、情報に接する機会が増えた一方で安易に使用する傾向がみられることなどの「社会状況に由来する原因」とする項目が挙げられた。最後に(2)の学習スキルで挙げられた目的意識、注意力・集中力等、意欲、及び問題意識の欠如が指摘された。これらは「個人に由来する原因」と考えられる。この他、②と③の分類にまたがるものとして、コミュニケーションの不足が原因であるとの指摘もあった。

(4) 現状を変えるための対策等について

アンケートの3は、「学生の学力・学習スキル・姿勢・意欲について、現状認識・原因・

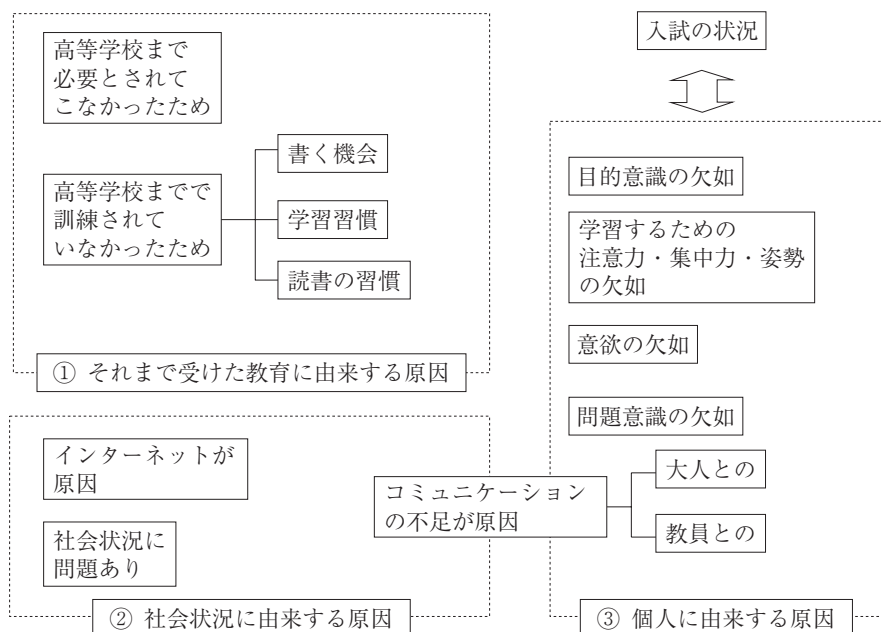


図1 教員が考える「学習スキルが身につけていない原因」の構造化

対策」に関する設問である。このうち、対策に関する回答をまとめると以下ようになる。

- ・教材などのトレーニング量をふやすこと
- ・初年次教育として充実させること
- ・実習、フィールドワークやボランティア活動など体験型学習を多くとり入れること
- ・入学予定の生徒に補習的な「入学前対応」を提供すること
- ・カフェなどを図書館に導入し魅力的な環境を整えていること
- ・毎日机に向かうなど、習慣を身につけさせること
- ・厳しい現実を見せるなど、卒業後の社会を意識した取り組みを行うこと
- ・やる気のある上位層をエリートクラスでトレーニングすること
- ・学生個別に目標設定や生活指導を行うこと

(5) 結果のまとめ

以上、アンケートの結果をまとめると、

- ① 初年次生の学力の低下やスキルの欠如は、5年前と比較して大きくなっているものの、ここ数年はそれほど低下していないと考える教員が多い。
- ② 教員からみた初年次生像は、概ね「授業を受容するための学習スキルやコミュニケーション能力を欠く」に集約できるように思われる。学習姿勢・意欲については「自発的に授業を聴き、勉学しようとする意欲に乏しい」というものである。
- ③ 欠けている学習スキルは、授業の聞き方などの、基本的かつある程度まで授業で教授可能なスキルの他、コミュニケーション方法の欠如など訓練が必要なものが含まれている。
- ④ 初年次生に必要なスキルが身に付いていないのは、そもそも教わってこなかったことや社会的な要因によるという意見の他、個人の資質に由来するとの意見もあった。

となる。

何時ごろから、どのような理由で学力・スキルが低下したのか、という時期と原因の問題は非常に興味深い。特に「ゆとり教育」をはじめとする大学入学以前の教育体制に関する議論は非常に重要であると思われる⁹⁾。しかし本稿では、今回のアンケートを初年次生の学力・学習スキルの改善に具体的に生かすという当初の目的に鑑み、この点は別稿で論じたい。

以下では、中堅文科系大学における教育を円滑に行うために必要な学力・学習スキルがどのようなものであるか、という点に絞って議論を行う。こうした議論は、ひいては大学入学以前の教育体制に求める要素として、別の視点からの議論を引き起こすという点でもより一層興味深いと考えるからである。

9) たとえば宇井(2009)は、問題と解決策を学生と、学生をとりまくステークホルダーの関係で整理しながら論じている。

4. 考 察

以上、アンケート結果をもとに、教員が初年次生に求める資質について概観してきた。以下では、この結果に基づき初年次生に必要なスキルを整理して、どのようなスキルを如何に教授すべきかについて考察する。また、2008年度より初年次生向けに実施している「リメディアル科目」での経験を踏まえた考察も併せて行う。

(1) 全国調査からみた本学の位置づけ

私情協調査(2008)が、大学全般に亘る幅広い対象について行ったものであること、及び時期がずれていることなどから単純に比較はできないものの、本学の実態と比較すると、表2, 3からは、ほぼ同等か若干それを上回る基礎学力不足や学習意欲欠如があると読み取れる。今回のアンケート調査が初年次生を対象にした回答、という制限を加味すると、ほぼ上記の調査どおりの結果と考えてもよいだろう。

(2) 本調査の限界と留意点

ここで、本アンケート結果の限界と留意点を指摘しておきたい。

まず、このアンケートの回答率は約38%であった。また、学部別の回答数については、概ね5学部から均等に回答が得られている。回答者の大部分が勤続3年以上であった。これは、一般的なアンケートとしては分析に十分耐え得ると思われる。ところで表4では、学習スキルごとに重要性を問うた結果をまとめているが、初年次教育では考慮する必要がないとの回答は少なかった。これは、元々初年次教育に関心が高い層が積極的に回答した結果であるとも捉えることができる。逆に言えば、初年次教育を不要と考えるか、または関心がない層はそもそも回答しなかったという懸念が残る。少なくとも、本アンケートの結果は、初年次教育の要・不要については、回答者の立場が不明確であることを前提に以下の考察を進めたい。

(3) 教員が初年次生に必要と考える2つの要素

教員が初年次生に必要と考える(もしくは不可欠と考える)学力や学習スキル・姿勢・意欲は、当然のことながら、各教員のバックグラウンドや専門及びそれらを基盤とした教育観に左右される。このため、初年次生に求める要素も教員によって千差万別になることが予想される。このような状況下で、初年次生にどのような学力・学習スキルを求めればよいのであろうか。ここでは、初年次生が大学入学後に、専門課程で必要とされるスキルを段階的に受容すればよいという前提¹⁰⁾をもとに、教員が初年次生に求める学力・学習スキルを整理し

10) ここでは、文科系学部を想定し、初年次の授業受容に必要なスキルと、後年次の専門科目やゼミナール及び卒業論文作成に必要なスキルを区分することを意味している。文科系学部では、通常このようなスキルを初年次で一括して習得せずとも、段階的に受容しても修学上支障がないことは大方の同意が得られると考えてもよいだろう。もちろん理科系学部などでは、状況は異なるのかもしれない。

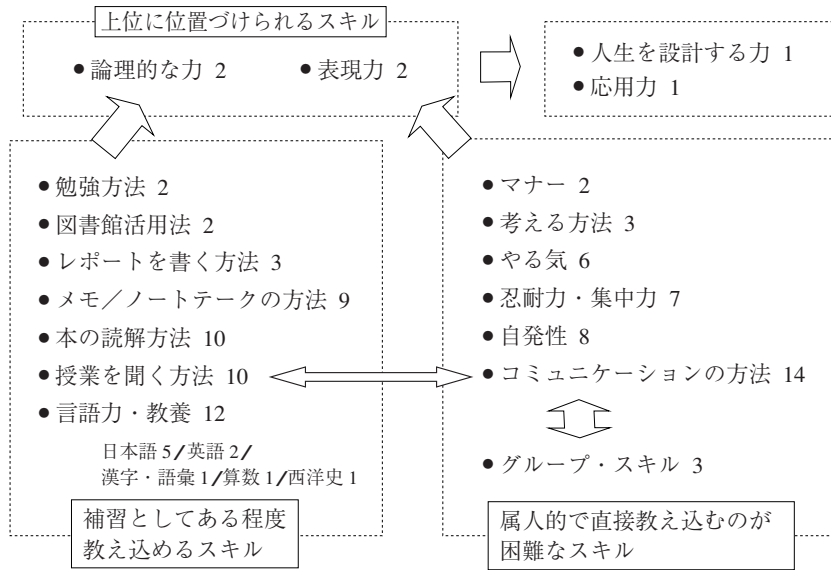


図2 教員が考える「初年次生に欠けている」学習スキル

末尾の数字は自由記述で回答のあった数である。複数回答のため合計は52を上回っている。

てみたい。

図2は、アンケートの回答を、通常の授業で教授可能かどうかの視点でまとめ直したものである。回答は大きく3つに分類されるように思われる。

最初の分類は、授業を聞く方法やメモやノートを取る方法など授業を受容するために必要な方法・ノウハウである。これらは、座学の授業で教授することが比較的容易なスキルである。2つめは、コミュニケーション、自発性や忍耐力・集中力などである。これらは授業を受容することには直接関係するわけではない。しかし前述のスキルを身につける前提として、非常に重要である。また前述のスキルと異なり、これらは座学の授業形式では養成しにくいスキルでもある。個人の資質にも依存し、かつ定着には長期に亘るトレーニングが必要であると考えられるからである。論理力や表現力及び人生を設計する力等は、これら2つの分類の上位に位置する高次のスキルと考えられる。最後は、前2項目には分類できないもので、いずれも、前2項目を基礎として、その延長上に位置すると考えられる上位に位置するものか、またはその他のものにあたる。

興味深いことは、教員の回答でもっとも多かった項目が、コミュニケーションの方法に関するものであったことである。これは、グループ・スキルや授業を聴く方法にも通じるものである。また、大学の学習の結果、得たものを表現することは必要であり、その基礎になるスキルとも考えられる。

初年次生に「コミュニケーションの方法」に関するスキルが欠けているという指摘は、14名から指摘があったが、これは全体の約30%に相当し、回答項目中でもっとも多かった¹⁾こ

れは、同じく指摘が多かった「自発性（8名）」「忍耐力・集中力（7名）」を含めて、いわば属人的であり、そもそも教室での座学形式では教授しにくく、しかも座学で方法論を教授しても受容と定着はあまり期待できないように思われる¹²⁾。そのためかこれまでの大学の初年次教育では対象になってこなかった事項である。前者の学習スキルが方法論であるなら、属人的な能力は、その方法論の前提になる基本的な原動力であり、生きるための行為に必要な「根源的な能力」ということもできよう。

これらは、初等教育から高等学校までの教育課程を通じて間接的に育成されるべき能力と考えられており、そもそもこれまでの大学教育では「常識」、もしくは前提条件であるように思われる。大学でそうした能力そのものを養成すること／鍛えることは範疇外と認識されている事項なのである。事実、山田他（2002）は初年次教育及びリメディアル教育の分類を示しているが、こうした根源的能力の育成は分類には含まれていない¹³⁾。

しかし、コミュニケーション関係のスキルの欠落については、想定設問（表4⑨）では約70%が最重要もしくは重要と回答し、自由記述でも数多く指摘されている。このことは、初年次生のこのスキルの欠落が深刻な問題となっていることを示唆していると考えられる。これまでこのスキルがあまり問題になってこなかったのは、このスキルが欠落した学生の存在が少なかったとか、存在しても授業に支障が出ない範囲であったのかもしれない。しかし、多くの初年次生にこのスキルの欠落がみられ、授業の運営に支障をきたすのであれば、補完の必要性は無視できないと考えられる。以上のように、学習スキルとコミュニケーション要素の2つを教員は、初年次生に不可欠の要素と考えていると思われる。

（4）「リメディアル科目」からの視点¹⁴⁾

本学では2008年度より初年次生向けに「リメディアル科目」を開講しており、筆者の一人（Y. T.）が担当している。通常「リメディアル科目」は、4つのタイプがあると言われている（山本，1999）が、本学では、文科系総合大学であること、大学受験の偏差値レベルで中位に位置すること、及び「高校までの教育とは大きく異なっている大学での修学に必要な知識・技能を強化すること」（「本大学履修要項2009年度版」より）との科目の趣旨から、主に大学教育に適応するための学習スキルの確認と向上を目的としている。

具体的内容を絞り込むために、受講者に対して授業初回にリテラシーの習得状況、及び彼

11) 上記の私情協の調査では、「(学生が) コミュニケーションをとろうとしない」は約13%、「コミュニケーションをとるのが難しい」は約15%であることを考えると、非常に高い数字といえる。

12) しかし、教員自身が「初年次生に欠けている学習スキル」として「コミュニケーションの方法」や「自発性」「忍耐力・集中力」を挙げていることは、現実に初年次生のこれらの能力が、通常の大学の履修において看過できないレベルにあることを示唆していると考えられる。

13) コミュニケーションは「コミュニケーション・プレゼンテーション」として含まれているが、このコミュニケーションは飽くまでアカデミックな表現力の意味である。一方、本アンケートでの回答は、教室内での必要事項の伝達などをはじめとする基本的な意思疎通である。

14) 詳細については辻（2010）を参照願いたい。

ら／彼女らが学生生活を過ごす上で困難に感じることを記述させたところ、大半の受講生がメモの取り方、レポートの書き方を習得しておらず、かつ半数近くがノートの取り方や勉強の仕方を教わっていない¹⁵⁾ことが明らかになった。また、コミュニケーションについては同級生などの水平関係よりも、教員や社会人などの目上との上下関係に困難を感じていることもわかった。このため本学のリメディアル科目では、

- ① 大学での通常座学授業を受容するためのノウハウの教授とトレーニング
- ② コミュニケーションの方法の理解とトレーニング

の2点に重点をおいてカリキュラムを構成して授業を行っている。現在3年目であるが、受講者からは他の授業を受容しやすくなった等、一定の評価を得ている。これら2つの要素は、今回の教員アンケートでも指摘されることから、少なくとも文科系の中堅大学の学生が授業を受容するためには、基本的な要素と考えてもよいと考えられる。

(5) 他のスキルの位置づけ

ところで、アンケートの自由記述では、この他にも、日本語力や英語力などの言語能力、歴史等の基礎的素養、及び論理力等の習得が必要との声をはじめ、文献調査、図書館利用等の方法論の習得の重要性まで多様なスキルの必要性が指摘されている。一方、初年次生向けの大学入門テキストでは、アカデミック・リーディング／ライティングをはじめ、ディベート、ディスカッション、プレゼンテーションの方法まで多様な方法が掲載されているものが多い。例えば、2002年に初版が発行され改訂版が5版を重ねる「知へのステップ」(くろしお出版)は、関西国際大学での実践から生まれたトレーニングブックであるが、初年次の半期12回でメモのとり方から、リーディング、情報収集、アカデミック・ライティング、プレゼンテーションまで、広範囲かつ多様な内容が盛り込まれている。「身につけておけば役立つであろう」という意味では、世の中には多種多様なスキルが存在しており、それらすべてが教授の対象になり得る。

これらのスキルは、後年次の専門教育を履修するために役立つ要素である。そして早期に教授しておくべきか、と問われれば、そうできれば非常に望ましいには違いはない。しかし、現実には様々な制約があり、初年次ですべてを教授することには無理があるように思われる。第一は時間の制約である。初年次は一般教養科目や語学が目白押しである。そもそも初年次ではリメディアル的なトレーニングに時間を割くことを意識した設計はされていない。第二に、入学時点での受容能力を考慮する必要がある。書くことや読むことに支障を感じている学生には、高次のスキルを教授する前に、基礎になる最低限のリテラシーを固めさせる必要がある。また、そもそもコミュニケーション能力が十分身につけていなければ、ディベートやディスカッションの方法を教授しても受容・定着は期待できない。特に、大学によって入

15) 教わったことは記憶しているが、実際にスキルが定着していない者を加えるとほとんど全員になる。

学生の学力に格差がある現在、特に本学のような文科系中堅大学においては、高等学校卒業までに十分な学習スキルを習得していないことを想定して対処する必要がある。しかし現実には、従来のアカデミックなカリキュラムに沿って授業が行われるのが一般的である。授業を受容し定着するために、まず第一段階でしっかり身につけねばならないスキルを固めておくことが必要とおもわれる。習得すべきスキルを段階的に受容するように科目設計する必要がある、ということである。

(6) 学習スキル習得へのステップ案

ここでは、以上の状況を踏まえて、中堅文科系総合大学における後年次の専門課程の履修を下支えするための学習スキルのプロセスを仮説として提示したい。図3は、前述の議論を踏まえて、初年次生が習得すべきと考えられる広義のスキルを整理したものである。

縦軸は上へ行くほど専門課程に近い高次の段階、下へ行くほど基本的なスキルである。横軸は、左ほど形式的に教授できるスキルであり、右へ行くほど属人的要素が強く、座学での大人数授業では磨くことが困難なスキルとなっている。言い換えれば、左ほど個人的に習得するスキルであり、右に行くほど対人的な要素が加味される、と表現することもできよう。

本稿での結果を踏まえると、初年次ではまず基礎段階の地固めを行い、高次段階へと進むステップが望ましいと思われる。

これまでの初年次生向けのワークブックや教育機関等から提案される教材の多くは、表3

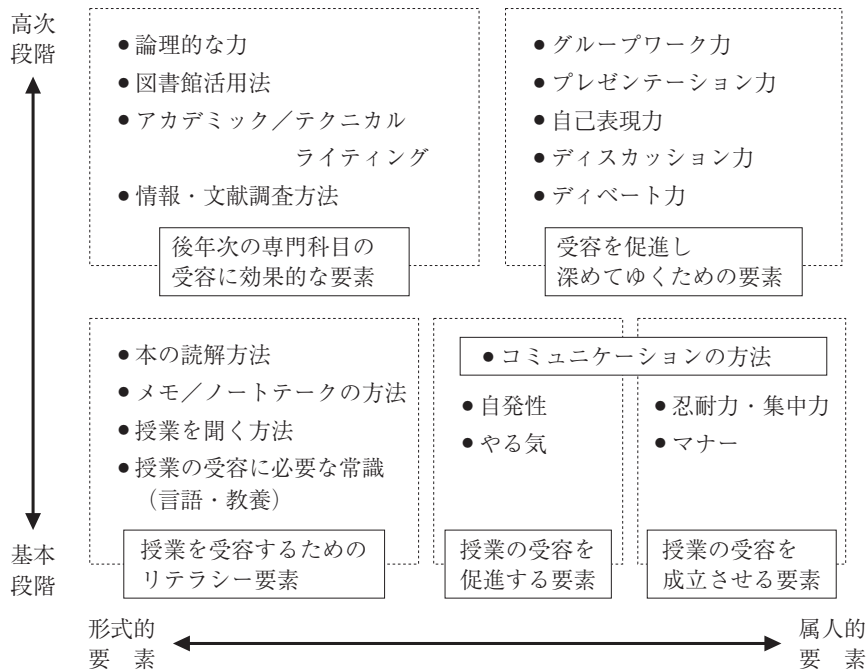


図3 修学に必要なスキルの整理と階層

のスキルを広く包含するものであるように思われる。これら汎用的なワークブックは、盛り込むスキルが広がる傾向にある。例えば、アカデミック・リーディングやプレゼンテーションなど一般的に是認されるものを含む内容になる嫌いがある。広範な読者・利用者を想定するためでもあり、このことは、ある程度やむを得ないことかもしれない¹⁶⁾。しかしこのために、高次段階のスキルまでが実施の対象となりかねず、絞り込みをしないと、広範囲のスキルは提示できたが、結果的に基本段階すら身につけていないことになりかねない。また、十分学習順序を考慮しないと、基本段階でのスキルを十分習得した後に行うべきものを、同時あるいは先行して学習することになりかねず、教育効果が不十分になるように思われる。初年次で教授するスキルは、入学してくる初年次生の習得状況を十分把握しながら、段階的に対応すべきであり、例えば本学のような中堅文科系大学の場合は、基本段階を明確に切り分けて対応することが不可欠であると考えられる。

尚、図3で示した基本的ではあるが属人的なスキルについては、コミュニケーションの方法の教授はある程度までは座学で可能であると考えられるが、限界がある。後述する演習色の強い授業や実生活でのトレーニングが不可欠であろう。また、自発性・やる気を向上させることは、個人の事情に由来する面が多い。個別に面談して事情を汲み取るカウンセリング対応が効果的であり、その点で多人数の座学授業では、その向上は難しい面があると考えられる。

(7) トレーニングの視点

ところで、基本的に文科系の大学では、後年次の専門課程であっても反復トレーニングの機会が少ないように思われる。理科系であれば、カリキュラムに演習や実験として、繰り返してトレーニングする機会が設けられており、授業で得た内容を定着させることができる。一方文科系の場合は、例え演習科目はあっても専門書の輪講形式が多く、授業で得たことの定着を直接行う機会が少ない。文科系では、授業内容の定着は、自習で対応するのが一般的な慣習であるのかもしれない。事実、大学の履修規定においても、単位修得に必要な勉学として授業の2倍量の自習が前提となっている(2010年度履修要項の記述による)。しかし、授業で学んだことを自習するためのテキストやワークブックは少ないし、特にコミュニケーションスキル等は一人で自習するには不向きである。授業カリキュラムに演習としてトレーニングを組み込む余裕はないため自習に委ねるしかなく、結果的に身に付かないまま後年次に進むことが懸念されるのである。例えば、演習時間を授業時間内に確保する方法や、自習用の教材を提供する方法が考えられる。これらの具体的な検討については、別稿で議論をしたい。

16) 予めスポンサーである大学や大学教員が指定する場合はこの限りではない。筆者達の経験からも、一般的な提案を求めた場合、教育機関各社が提案するものは、本稿でいう高次段階のものが中心になることが多かった。

(8) 今後の展望

本稿では、教員アンケートを基にして、初年次生に必要と考えられるスキルを抽出・整理した上で、段階的にこれらを受容するように設計すべきであることを議論した。本稿では、これらのスキルをどのように受容するのかという、具体的な教授方法や教材については対象としなかった。今後は、スキル受容を促進するための方法やトレーニングのための教材の精査が必要になると考えられる。

学力低下を入学時に食い止める議論も様々な形でなされている。しかし現実には、教員の想定を超えた（想定枠外）の初年次生を受け入れざるを得ず、少なくとも（教員が最低限必要と考える）学習スキルを身につけていない者には何らかの対応が必要になっている。具体的な対応策は、虚心坦懐に初年次生の学習行動を追跡することから始まる。少なくとも実際の教育を担っており、その意味で最も「学生を知っている」教員の所感をまとめたものが本稿である。本稿が初年次教育に関する建設的な議論のひとつになり、具体的な対応策に結びつく端緒になれば望外の喜びである。

謝 辞

アンケートに回答下さった桃山学院大学の52名の教員の皆様方に感謝します。また、アンケートの集計にご協力下さった奥村理恵氏、草稿にアドバイスを戴いた上村潤子氏・野原一徳氏（本学学生相談室）に深謝します。尚、本稿は総合研究所共同プロジェクト「中堅大学生に必要なリテラシー能力の研究」（08共191）の研究成果です。

参 考 文 献

- 山本以和子「日本の大学が捉えているリメディアル教育とは？」(株)ベネッセ・ホームページ
(http://benesse.jp/berd/center/open/report/kyoikukaikaku/2000/kaisetu/nihon_remedial.html)
- 辻洋一郎「中堅文科系大学におけるリメディアル科目はどうあるべきか」桃山学院大学総合研究所紀要, Vol. 35, No. 3, pp 31-52 (2010).
- 山田礼子, 沖清豪, 森利枝, 杉谷祐美子「私立大学における一年次教育の実態——学部長調査（平成13年度）の結果から——」日本教育社会学会第54回大会発表要旨録, 206-211 (2002).
- 私立大学情報教育協会「平成19年度私立大学教員の授業改善白書」
(<http://www.juce.jp/LINK/report/hakusho2007/hakusho2007.pdf>) (2008).
- 柳井晴夫「教科科目で測られていない学力とは何か」『学力—いま, そしてこれから』(山森光陽・荘島宏二郎編著), pp 75-99, ミネルヴァ書房 (2006).
- 石井秀宗, 椎名久美子, 前田忠彦, 柳井晴夫「大学教員における学生の学力低下意識に影響する要因についての検討」行動計量学, Vol. 34, No. 1, pp 67-77 (2007).
- 有馬昌宏「SCMの視点からみた大学生の学力低下問題」オペレーションズ・リサーチ, Vol. 54, No. 5, pp 236-242 (2009).
- 宇井徹雄「大学生の学力低下問題とその解決策」オペレーションズ・リサーチ, Vol. 54, No. 5, pp 243-248, (2009).
- 学習技術研究会「知へのステップ」改訂版, くろしお出版 (2008).

資料1：アンケート調査用紙

2009年10月19日

専任教員の皆様へ

学生の学力等に関するアンケートの件お願い

総研の共同研究プロジェクト「中堅大学の学生に必要なリテラシー能力の研究」(08～09年度)の一環で、以下の要領でアンケート調査をさせていただくことになりました。是非ともご意見を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

本メールでお願いするとともに、メールボックス・ルームにも同じ書面を投函しました。いずれかでご回答いただき、10月23日(金)までにメールボックス・ルームの経済学部辻のボックス、もしくはメールに添付する形でご返信いただければ幸いに存じます。

ご多忙のところ勝手を申し上げ恐縮ですが、よろしくお願い申し上げます。

総研共同研究08共191

辻 洋一郎
巖 圭介
藤間 真

1. アンケートの趣旨

「本学に入学する学生が、専門教育を開始する2年次までに身につけるべき能力はどのようなものが必要か」「大学初年次のリテラシー教育をどのように設計すべきか」の観点で、文献調査や1年次の「リメディアル科目」での試みを通じて共同研究を行っております。

ところで、学生の学力・学習スキル・姿勢については以前より憂慮する声があります。特に本年度春学期は「今年の1回生は学力や学ぶ姿勢に著しいレベルダウンが見られる」との先生方の声も耳にします。ついては教員側からみて、どのような点が欠けているのか、補強すべきかについて、先生方のご印象やご意見をアンケートの形で聴取させていただき、共同研究の資とさせていただきたく、本依頼となった次第です。

2. アンケートの結果について

- ① 当然のことですが、本アンケートは個人情報保護の立場で取り進めます。結果の公開は、集計のみで、個人名や個人を特定できる情報は公開しません。
- ② 結果は、1年次の「リメディアル科目」での教材に反映させる方向で検討します。
- ③ また論文等の形で皆様方にご報告するとともに、学会発表などを行うこともあります。

学生のリテラシー能力等に関するアンケート

以下のアンケートは、学生の、①学力、②学習に必要なスキル（講義の受容力や読み書きの能力）、③学習の姿勢について、先生方のご意見をうかがうものです。各質問に対して、該当するものに○をつけて下さい。その他、ご指摘などがございましたら、末尾の自由記述欄にお書き添え下さい。

1. 学生の学力について

(1) 現1年次生は、現3年次生が1年次だった時に比べて学力はどうでしょうか

- ①非常に ②どちらかといえば ③同じ程度 ④上がっている ⑤わからない
 落ちている 落ちている である

2. 学習スキル（講義の受容力や読み書きの能力）について

(1) 現1年次生は、現3年次生が1年次だった時に比べて学習スキルは身についていますか

- ①非常に ②どちらかといえば ③同じ程度 ④上がっている ⑤わからない
 落ちている 落ちている である

(2) 現1年次生は、5年前の1年次生に比べて学習スキルは身についていますか

- ①非常に ②どちらかといえば ③同じ程度 ④上がっている ⑤わからない
 落ちている 落ちている である

(3) 先生が、最近、1年次の学生に欠けていると痛感された学習スキルはなんでしょうか。

(複数回答可：次ページ記載の項目を参考になさってください)

[]

(4) 専門教育を行う前の1・2年次までに学習スキルを習得させるプログラムは必要でしょうか。

- ①是非とも ②できれば ③どちらでも ④不要である ⑤わからない
 必要である あればよい よい

(5) 学生が専門課程履修までに身に付けておくべき、学習スキルは様々ですが、先生が必

(3) 学習姿勢・意欲について、こうあるべきと思われるものに必要度をつけて下さい。

A：ぜひ必要，B：必要，C：どちらかといえば必要，D：必要ない

- | | | |
|--------------------------|------------------|---|
| <input type="checkbox"/> | 講義を聞く意欲 | |
| <input type="checkbox"/> | 講義に対する興味 | |
| <input type="checkbox"/> | 遅刻せず，出席する意思 | |
| <input type="checkbox"/> | 自発的に学ぼうという意欲 | |
| <input type="checkbox"/> | 予習 or 復習しようとする姿勢 | |
| <input type="checkbox"/> | 《 | 》 |
| <input type="checkbox"/> | 《 | 》 |
| <input type="checkbox"/> | 《 | 》 |
| <input type="checkbox"/> | 《 | 》 |
| <input type="checkbox"/> | 《 | 》 |
- } 上記に適切な項目がなければ
ここに記入下さい。

3. 学生の，学力・学習スキル・姿勢・意欲について，現状認識・原因・対策についてご意見をお書き下さい。

お差し支えなければご記入下さい。

ご所属 () 学部 お名前 ()

以上です。ご回答ありがとうございました。

資料2 自由記述の回答

2-1：「先生が，最近，1年次の学生に欠けていると痛感された学習スキルはなんでしょうか」に対する自由記述

- ・大学生として必要な語彙力
- ・語彙力を基とするコミュニケーション力
- ・小学生レベルの算数がまったくできない
- ・読解力
- ・批判的理解力
- ・表現力
- ・研修中なのでかけない
- ・とにかく図書館という所に行ってみようという好奇心
- ・諸項目以前の問題として積極的に取りくもうという気がまったく見られない学生が見ら

れる。

- ・やる気の無さを隠そうともしない。
- ・注意力の欠如
- ・集中力の欠如
- ・人生設計のあいまいさ
- ・聞く力が大変落ちている。
- ・漢字を書けない
- ・少しの暗記でも答えられる作業でさえ実行できない学生の増加
- ・知らない物事への興味・関心の低下
- ・知らない物事の情報の収集力と根気の低下
- ・日本語能力
- ・ノートする力
- ・他人の前で発言する能力
- ・(5) であげられた全ての項目です。
- ・講義をメモするスキル
- ・教員と会話するスキル
- ・自発的に学習目標をみつけるスキル
- ・「読む」「書く」「話す」のコミュニケーション能力
- ・基本的読み書き能力
- ・聴く力
- ・話す力
- ・本を読みこなす力
- ・考える力
- ・学習スキル以前のマナーが欠けている
- ・自分で解決してみようとする忍耐力
- ・正しいか、誤りかという白黒デジタル判断力ではなく、中間的で状況を考慮した認識・理解・総合的判断をとまなう思考力
- ・漢字の読み書き
- ・英語の能力
- ・文章力
- ・まとめる力
- ・「毎日机に向かう」習慣、つまり日々の学習習慣
- ・論理的に考える力
- ・必要なことをメモに取る。
- ・教員と会話をする。

- ・ 集中力
- ・ 読書能力
- ・ 表現力
- ・ 忍耐力
- ・ 「日本語を読み書きする力」
- ・ 聞いたことを理解する
- ・ 応用する
- ・ 板書する
- ・ 人の話を聞けない！
- ・ 話を聞く力
- ・ 講義を長時間集中して聞く力
- ・ タバコの吸殻をちゃんと決められたところに捨てられない，教員の部屋に入ってくるときにノックできないなどの基本的な生活力は落ちている
- ・ 学力的なことはそんなに変わらないと思う。
- ・ まったくしゃべれない学生
- ・ リーダーシップのまったくない子
- ・ メモを取る力
- ・ 話を聞いて理解する力
- ・ 勉強の仕方
- ・ モチベーション（やる気）
- ・ 講義に対する姿勢
- ・ 抽象的思考能力
- ・ 言語能力（特に日本語，英語の基本的語彙）
- ・ レポートの作成
- ・ 情報の収集（図書館利用）
- ・ ノートテイクの技法
- ・ 自分で問いを立てて解決しようとする，自学自習の構えと習慣
- ・ 本を読む能力
- ・ レポートを適切に書く能力
- ・ 発言・質問する力
- ・ 講義の理解力
- ・ メモ
- ・ 読書
- ・ 質問
- ・ 質問する力

- ・ 学習する姿勢（自ら取組もうとする態度）
- ・ 要点をとらえる力
- ・ そもそも座席に座ってられる忍耐力
- ・ 講義を聞く
- ・ メモする
- ・ 日本語の読み書く基本的な学力
- ・ 西洋史などの基礎知識
- ・ 英語力
- ・ 共感するスキル
- ・ 共感を表現するスキル
- ・ わからない事を質問するスキル
- ・ グループで作業するスキル
- ・ リーダーシップスキル
- ・ 聞く力：正確にいうと、少しでも難しい話を聞いた途端、脳波を止めて、目は開いているが、生気を感じない学生層がふえた。
- ・ 本を読みこなすスキル
- ・ 教員と会話すること
- ・ 勉強の仕方
- ・ 講義をメモするスキル
- ・ 自己学習力
- ・ 講義を聞いて理解する力
- ・ コミュニケーション力
- ・ 例えば知らない2文字熟語の意味を、それに含まれている漢字の意味から予想してみる、というような、自分の知っている知識を動員して未知のものを知ろうとするような能力、あるいは態度が全く欠けている学生がいる。
- ・ 「習っていないものは知らないし、知りようがない」という姿勢であり、知識の取得量の少なさという問題とは別に、知識を吸収する力というところにも問題がある。

2-2：「学習スキルが身に付いていない原因はなんだとお考えでしょうか」に対する自由記述

- ・ 家族間のコミュニケーション量が不足
- ・ 読書習慣がない（じっくり長文—新聞記事程度でも—を読む持久力がない）
- ・ 小学校・中学校での基礎的な学習の不足。
- ・ そもそもそのような教育を受けていない。
- ・ 教育する側（高校・大学とも）にそのような教育の必要性を感じてこなかった。

- ・インターネットを安易に使いすぎる。
- ・レポートの結論まで、インターネットを丸写した学生がいて驚いた。
- ・幼児段階からの読書習慣の欠如。
- ・小学校から大学までの図書館のすばらしさに関する啓蒙教育の欠如。
- ・身につけようとする意志がない。
- ・注意力や集中力の欠如
- ・人生設計のあいまいさ
- ・高校までの教育の仕方にある。自分の才能を伸ばすような学習方法を身につけていない。
- ・人の話を聞いて理解する力が圧倒的に弱い。
- ・学習経験が少なく学習習慣が身につけていない
- ・「なぜ」「どうして」という問題意識を身につけていない。
- ・本を読む習慣がないこと。
- ・勉強に対する意欲が低いこと。
- ・「これを勉強して何の役に立つのか」という疑問のところで止まっている。目的意識をもたせることで、学習スキルも身につくと思われる。
- ・読書不足
- ・書く機会の減少
- ・ゆとり教育
- ・中・高の教育
- ・大学で学ぶ知識と卒業後のイメージがかい離しており、なぜ大学で学習しなければいけないのか具体的な動機づけ、目的意識がないのではないのでしょうか？
- ・周りも学習スキルがなさそうだと安心しているようにも思います。
- ・人間どうしのコミュニケーション量の不足・家庭においても、学校においても言語で応答しあうことの過度な不足
- ・読み・理解し、書き、話す（発表する）という経験を高校までにほとんどしていないようである。
- ・今まで、何とかなっていて、上記のようなスキルが不十分でも不自由をかんじなかったからではないでしょうか。
- ・新学力観にともなう小中高のゆとり教育の悪影響
- ・マークシート方式による大学入試の悪影響など受身的な過剰情報メディア社会の悪影響として、旺盛な知的好奇心を欠如するに至った。
- ・初中等教育段階での訓練不足
- ・日々の学習習慣の欠如だと思います。
- ・ノートをとる習慣を持たない学生がいるため、学級崩壊を起こしている高校からの進学者が増えたためではないかと思っています。

- ・スキルがどうこうというより、高校までの教育で痛めつけられて、学習や勉強というものに良い思いがない。
- ・「教育」「教員」というものに対する信頼感もない。
- ・大学で、やる気を出させる方法をまず考えることが第一。
- ・学習スキルは次の段階で考えるべきと思うが、現状でも必要であると考え、同時並行でやっていかなければいけないと思う。
- ・詰め込み方式の教育のため高校までは必要ないから
- ・頭でっかちの傾向が強くて、思い込みが激しい、など
- ・学習習慣のなさ
- ・現実の社会認識のなさ
- ・新聞を読まない。
- ・意欲を掻き立てる動因を認識できないからだと思っています。
- ・教師にしろ、何にしろ、話をしている人に対して敬意を払うという、エチケットから、まず身についていない。
- ・反復練習（訓練）の不足
- ・学習の必要性を感じていない
- ・学校での学習と社会で自立することが結びついていない
- ・失敗をしながら粘り強く学ぶという姿勢ができていない
- ・職業に就くというイメージができていない
- ・本を読んでいない
- ・新聞やニュースを見ないため、社会に興味を持たず疑問も生じないこと。
- ・疑問が生じれば友人、親や教師と色々議論し、ますます色々調べたくなるし、論理的思考力や理解力も高まるが、議論する所までなかなか到達していないのではないかな。
- ・勉強に対する意欲を持っていないこと。
- ・家庭、小・中・高の教育
- ・少子化→全入、の影響。従来ならば入学できなかった学生が入学してきた。
- ・AO入試。一般入試の学生と比べて明らかに基礎力がない。周囲の足を引っ張っている。
- ・大学入学までの教育に問題があり、学習スキルを十分に習得できていない。
- ・とくに必要性がなかったから？ 高校までは、与えられたものだけをやっていた。
- ・初等・中等教育でスキルをきちんと身につけさせていない。日本の公教育を立て直さない限り、問題は解決しないのではないかな（自分の子供たちが通った学校の現状からそう思わざるをえない）
- ・（5）以前に、小さいころに学習の訓練を受けていない。
- ・聞いて理解する及びメモをする方法）高校までの講義において、板書のみでよかったのではないのでしょうか。聞きながらメモを取る習慣がなかったのではないかと考えます。

- ・基礎学力の不足（高校で学ぶべき西洋史など）
- ・文章を書く力の不足
- ・教えている先生との文化的ギャップがある。
- ・教えていないのでは？ 期待している事が伝わっていないのでは？→教える時に「できない子たち」というラベルをつけていませんか？
- ・高校までの経験：ぬけ落ちたことが放置されたまま
- ・大人がお節介すぎ：自分で考える力を削ぐ
- ・大人がかんじんな所で放置：子供の成長や自立にとって何が重要なことなのかを分かっていない。
- ・高校までの教育
- ・偏差値の低下（受験生の減少）
- ・大学に入学するまでに、そのような学習をする機会がなく、その重要性や学習意欲が育っていない
- ・中学・高校ですでに学習に対する意欲をもっていない子どもすなわち学習スキルが身につかない子どもがたくさんおり、そのような学生が桃大レベルの大学に入ってきているように思います。
- ・中・高の先生方も昔のようにきびしく指導することが難しい状況にあるようです。
- ・2(3)のような問題の起源は、高校までの学習がひじょうに機械的なものになっているところにあり、考えること、わかることなどの楽しさを実感したことが、ほとんどないことによるのでは、と感じる、これは、わかろうとする意欲や志向性の問題になるか。これがないと、どんなにわかりやすく授業をしても（これはもちろん前提だが）そもそもそれ以前のところでつまづいてしまう気がする。知ること、学ぶことが自分にとって「役に立つ」「面白い」etc ものだという実感を得るチャンスの提供が必要か。

2-3：「学生の、学力・学習スキル・姿勢・意欲について、現状認識・原因・対策についてご意見をお書きください」に対する自由記述

- ・高校（あるいは中学）時代に積み残した「学習習慣」を身につけることの失敗をひきずったまま大学に入学している。
- ・初年次教育（学力・学習習慣の欠如のばらつきを矯正する）の必要性を痛感します。
- ・担当する教員陣もしっかりと理論武装し、「科学的」データをそろえ、ダイナミックにとりくむ覚悟が必要であるし、大学側もサポートする体制をつくるべき。
- ・学習意欲も感じられず、勉強しようとする態度もない状況
- ・小学校の教育を昔に戻すことが大切。
- ・基礎演習などで学習スキルをしっかりと教えることが本学の最重要課題である
- ・いい教科書が出てきたが、教材の量が少ないために基礎的な skills を身につけるまでに

っていない。

- ・「読解力」「表現力」が最重要。
- ・入試が学生にとり簡単すぎる。その上、安易に教員が単位を与えすぎていないだろうか。言葉を選ばないといけないだろうが、これが大学かというような学力レベルの者には、卒業資格を与える必要はないと思われる。私の二つの講義科目は、いずれも国家資格に関わるのでDとX合計が5～6割である。全学科目にあてはまらないとしても、この比率で学生が単位取得できないと卒業生が半減するが、その位の覚悟をして教育にあたらなないと本学のレベルを問われると思われる。
- ・各教員が各々の授業のテーマについて、如何に学生の興味や関心を引き出せるか
- ・図書館に行って一人で本を読むという楽しさを四年間の大学生活で1回でも味わわせることができるか、ということが最重要課題だと考えます。
- ・応急処置として、とりあえず、お茶の水女子大のように本学も図書館内に呼び水となる禁煙のおしゃれな喫茶店（例えばスタバを誘致）と飲食可能な自習室を開設するとよいのではと思います。
- ・教室には居るのだが、全身で授業を拒否している雰囲気放射している学生が眼につく。机上にはノート、筆記用具など一切出していない。ただ坐っているだけ……。見ていて痛々しいし、周辺の受講生への悪影響が強く懸念される。
- ・座学による学習には学生はほとんど興味を失っている。それで体験学習を重視する教育に力を入れてきたが、それなりの効果はでていない。
- ・全体として暗記作業の経験値さえ少ない学生が増えているので、初歩的な学習のスキルや姿勢でさえ確立できていない。学ぶことは暗記でないことを理解させることによって意欲は刺激できるが、すぐにスキルの問題に直面する。
- ・もはや専門科目は砂上の楼閣だから、意欲を高めることに重点を再配分し、リテラシー教育と全面的に連携・協力すべき時期だと思います。
- ・国際教養学部改組したことで、学力と意欲の低下が著しい。大学で何を学びたいかという目的が消滅してしまったからではないか。少なくとも改組した時期と重なる。せめて理念としてだけでも“専門教育”をすてるべきではなかった。
- ・専門書を読ませてレポートを書かせる方法だけでは、今の学生の能力向上や意欲向上につながるとは思えません。
- ・やはり実践的学習もまぜることによって「やりながら興味がわく」ということも可能かと思えます。
- ・1年次生対象の授業にあまり担当していないので、適切に回答できませんでしたが、近年、いわゆる「学習障害」をもっていると思われる学生が増えてきたと感じています。
- ・現1年生は現2年生に比べて真面目であり、素直に教員のいうことに従っている。演習Ⅰにおける学力についても偶然かもしれないが、現2年生より現1年生の方が高い（漢

字が読めるというレベルで) と感じる学生が多い。

- ・ 学習することの意味 (効能) を具体的に見い出せない。大学での学習がどういう役にたつのかを、いろんな局面で説く必要があるように思う。
- ・ 大学での学習以前の問題のようにも思います。(モラルなど)
- ・ 基礎学力の低下が、知的興味や考える力の低下と相乗的に作用しているとは思いますが、それ以上に、教員の側の教育・研究意欲の高まりが求められているのではないでしょう。
- ・ 各自の専門教科を通して、学生のモチベーションを上げる座学の大切さを再認識することではないでしょうか。
- ・ 基礎演習の時間を週2回にして、より、ひとりひとりの学生のコミュニケーション能力を育成する。ともかく話させる、書かせる
- ・ 人間は言語を使用するのだ、文化の違う人間と意志伝達するのも言語であり、自分を表現しないと社会の中に居場所はないことを伝える。(具体的教授法例のコレクションを教員で共有すること)
- ・ 学習意欲を引き出すことが、まず第一に必要なだと感じているが、原因もよくわからず、対策に苦慮している。学習意欲のある学生とない学生の差が著しく、指導を一律に行なうには無理があるように思われる。選別なども必要になるのかもしれない。
- ・ ごく少人数で指導すれば確実に成長すると思いますが、現状では無理です。私にできる範囲でやるだけです。尚、現1年次生と5年前、現3年次生との比較について、学生それぞれでちがうので、現1年次生がいろいろな点で落ちているとはいえません。
- ・ 具体的に日常の授業を誠実かつ、レベルを維持してやっていくより、仕方がないと思われる。
- ・ 素読対策する授業 (興味のある分野について)
- ・ 必修化 (選択必修)
- ・ 教員側の問題意識の向上, スキルアップ
- ・ 「読み・書き・算盤」に象徴されるような基礎学力は、日々の学習によって育まれていくものだと思います。しかし、それが欠如しているので、基礎学力不足が生じています。したがって対策は、まず「毎日机に向かう」習慣を身につけることですが、大学というシステムの中で、それを身につけることは難しいですね。
- ・ 変化については実感していません。彼らの能力は本当に落ちているのでしょうか。また、それを理由にして「今の学生はダメだ。講義にならない」と思考停止してしまっているのではないかと感じています。こうした発言を平気でする方がいるのは大変悲しいです。基本的なノートのとり方については1セメスターを経て、単位を取っていない学生を対象とした秋学期の講義が用意されていけばよいかと思います。
- ・ 私は経営学部の基礎演習で学習スキルの基本的なことを教えているが、こちらが思っているほど、できない学生たちではないと思う。しかし、やる気がない (この原因につい

て、どのように考えているかは2(6)で書いた)ので、それを起こさせること、これからの人生において今の甘い現状認識が通じない、という厳しい現実を見せることが必要だと思う。それが解決すれば、様々な対策を講じることができると思う。

- ・何よりも感じているのは、教員と学生とのギャップの拡大である。オフィス・アワーを利用して研究室に来る学生は最近5年(?)ほど激減し、今はまったくといっていいほど(ゼミ生でさえ)来ない。私の「人気」が落ちているだけかもしれない(笑)が、学生の学業への取り込みの気迫のなさをも物語っている気がする。気迫がないとどんなスキルを身につけさせようとしても難しいと思う。授業時間を減らして西洋の大学をモデルにしたカリキュラムを導入すれば問題解決に役立つかもしれない。
- ・試験前にしか教科書を読まない学生もいる。また、教科書を持っていても、全く読まない学生も多い。「難しい(難しそう)」漢字の一杯詰まった「詰まらない」・「自分の将来の役に立たない」本という認識なのだろう。結果(?), レジュメの文章は年々減少し、図が多くなっている。
- ・ひとりでも多くの学生に知る喜び、学ぶ楽しさを感じさせることができれば……というのは簡単ですが、具体的なやり方としては日々の授業を通じてとしか答えようがなく……。
- ・日本語の聞きとり、ディクテーション、要旨のまとめなどを、実施したらどうか、と考えている。
- ・毎週受験し、その結果がすぐに確認でき、向上していくようなプログラム、公文式プリント? の省人力版、学生自動学習システム
- ・できるだけ社会に出ることのイメージ、仕事につき、お金を稼ぐ、結婚して子どもを育てるなどのイメージを作ること。そのために、実習、ボランティア活動、フィールドワーク、サービスマーケティングなどの現場での教育活動を多く取り入れる。
- ・教員が研究者に納まらず、彼らと一緒に汗水流して取り組む。
- ・対策として、なぜ学ぶのかについてを再確認させる必要がある。
- ・2~3割常に存在している〈上位層〉の学生の意欲・やる気を失わせないようにさらに一層UPしていけるように講義レベルを落とさず(評価基準はdown)に。
- ・1年次演習の充実(リアルタイムの受講経験, 作成ノートの活用。潜在的な授業評価にもなり機能的。)
- ・教材を学生のレベルに合わせて少しでも頑張ったら褒めて学習意欲を高める。現在のレベルに関わらずまじめに努力させることが重要。まずは、頑張りや努力する態度(やる気)向上心がなければはじまらないのでは。特に、そのような学生には学習以前に必要な、個別の「目標設定」や「生活指導」も合わせて必要かも。
- ・現状認識: 年々、テレビを観るように受講する学生が増えている、気がする。原因: 「教養」が失墜し、知と娯楽産業的なものの区別がつかなくなってきた。対策: 「あなた

はどう思うの?」といちいち問いかける。2人称の語りかけを増やした。

- ・新書レベルの本でも読みとることが困難な学生が増えている。レポートには一応書くが、文章表現の誤りはもちろん、それ以前に誤字・脱字が以前に比べて非常に増えている。大学入学前の教育が不十分であることが原因なので、読解と作文の訓練をすることが重要だと考える。したがって、大学入学後できるだけ早期に、これらのスキルを身に付ける授業を設置することが望まれる。
- ・授業を聞いてみなければ、内容はわかりません。その状態で興味は持ちにくいでしょう。でも登録期間は1週間。それに学期初めと終わりです。いぶん違うかもしれません。
- ・基礎学力を上げるプログラムは必要と思いますが、どのような形でやればよいのか、その方法が問題かと思えます。
- ・教える先生がまず学生の視点や考え方を学びそこに合わせて意欲や興味を引き出すべき。
- ・東大や京大にいる学生とはちがうが、桃山の学生のような方々が今の日本経済・社会をささえ、作っていると感じる。(スタートラインが有名トップ大の若者とは違うが、大きなポテンシャルを持っている学生が多いと思う。)
- ・エリートクラスを作ってやる気がある学生や出来る子をトレーニングすべき。そのクラスは毎年落ちていく生徒もいれば入ってくる生徒もいて、流動的にすべき。19~21才はまだまだ伸びる時期ですから、期待している事を伝えてエリートを作り出していくべき。
- ・少なくとも高校時点で学力・学習面でのつまづきが大学でも継続している。(実態はもっと深刻なはず) →入学した学生に対する対応も必要だが、入学予定の生徒に対する補習的授業を高校に提供することも必要になってくるのではないか。
- ・学習姿勢・意欲は、講義ごとに異なると思われるので、個別に検討する必要があるかと思えます。スキル低下についての自分なりの対策は、1、「忍」の一文字、2、すぐに怒らない、3、同じ目線に立つよう努める(かなり難しい)、4、気長にとり組む、5、サービシ業だとわり切る。というところでしょうか。
- ・大学入学時点から、大学入門セミナー、基礎演習などの履修を義務づけ、大学での基本的な勉強の仕方をはじめに教え込んでいくことがますます重要になってくると思えます。それも単発的なものでなく、それ以降の(専門)演習などへと繋げていく必要性を感じます。今回のアンケートは、質問文の趣旨がわかりにくく、不慣れで回答しにくい形式でした。的外れな回答かもしれませんがどうぞご容赦ください。
- ・学生のスキル等向上とともに、教員側の(最近の学力の低い学生への)耐性力UPも必要に感じます。
- ・よく言われる学習意欲の問題に、結局は問題はつきつめられるように思われる。これは直接は教え込めないものであるため、少しでも学生たち本人が持っている。何かへの興味を活かして、それを知的な成長につなげるための色々な工夫が必要である。その際、

強制と誘導と放任 etc, を様々な条件に応じて適切に使わせるセンスと能力が教員には求められる。もっと組織的な実践が必要で、互いのとりくみを見せ合うだけでもずいぶん変わりうるのではないか？ あるいは、教育学のプロが工夫しているような教材やプログラムなどを共有するだけでも参考になるのでは？

以 上

Skills that faculty members expect among freshmen: a survey

Youichirou TSUJI

Makoto TOHMA

Keisuke IWAO

We conducted a survey to gather faculty members' opinions on the kind of knowledge and skills that newly-enrolled students should have in order to be able to adapt to the learning environment in a mid-level university. The purpose of this survey was to provide a basis for discussion of the fundamental skills required for university studies, but which are often absent in recent freshmen, resulting in the need for some assistance mechanisms. The results of the survey showed that most faculty members find that many freshmen lack literacy and communication skills. Based on these results, we discuss which skills, at which stages, should be emphasized in remedial classes.